

北海道で！縄文を知る

第11回

：縄文世界遺産(かつてにフットパス)
鳥と縄文人



江田 真毅 (えだ まさき)

北海道大学総合博物館教授

筑波大学人文学類で考古学を、東京大学大学院農学生命科学研究科で生態学を、九州大学大学院比較社会文化研究院で分子生物学を学び、鳥取大学医学部では解剖学教育に携わる。各分野の視点・手法を取り入れながら、主に遺跡から出土した鳥の骨を研究している。モットーは「目的のためには(良い意味で)手段を選ばない」「レモンを手に入れたらレモネードを作る」。2015年日本鳥学会黒田賞受賞。

ごみステーションからごみを引っ張り出そうとするカラス。家の軒先や電信柱に巣を作るスズメ。親子井の鳥(鶏)肉と卵。現代に生きる私たちにとって、少なくとも一部の鳥はかなり身近な存在です。それでは、本連載の主人公、縄文人にとって鳥はどんな存在だったのでしょうか？遺跡からみつかった動物の骨から当時の人々の生活を復元する「動物考古学」の知見から、鳥と縄文人の関係についてご紹介します。

動物の骨の考古学

通常、動物の骨はバラバラの状態です。遺跡からみつかります。私たち動物考古学者は、遺跡からみつかった骨の1本1本を骨の標本と比較しながら、どの動物のどの部分の骨かを突き止めていきます。この作業を「同定」と言います。遺跡からみつかるすべての骨を同定できるわけではありません。上腕骨や大腿骨といった四肢の骨はかなり小さなものでも同定できる一方、肋骨や椎骨などの骨ではかなり大きなものでも哺乳類あ

るいは鳥類以上には同定できないことがほとんどです。また、鳥の場合、遺跡からみつかった骨がどの「種」のものかを同定するのは困難なことが多く、どの「科」のものかが同定されます。その主な理由は、ほとんどの地域に、近縁な同じような大きさの種が複数生息するためです。例えば私たち現代日本人にとって最も身近な鳥の1つである「カラス」。北海道に生息するカラスは主にハシブトガラスとハシボソガラスの2種です。ともにカラス科に含まれます。両種を比べるとハシブトガラスのほうがくちばしが太く、一般に体が大きいです。しかし、くちばしを除く両者の骨はよく似ていて、大きさにも重複があります。識別は困難です。一方、キジやニワトリなどを含むキジ科、あるいはアホウドリやクロアシアホウドリなどを含むアホウドリ科とは、カラス科の骨は明確に識別できます。そのため、遺跡からみつかった骨はどの「科」のものか？が同定されるというわけです。

遺跡からみつかった骨の分析から分かることは、過去の人々が利用した動物のリストに留まりません。みつかった動物を人々が獲得するために必要な条件をその動物の生活環境や習性から考えることで、人々がその動物を獲得した季節や環境、さらに捕獲のために必要であった技術などを推定できます。例えば、鳥には季節によって生息地を替え、一年のうち特定の季節にしか日本列島周辺にいないものが多数います。また、主に本土から離れた海洋の島々で繁殖し繁殖期以外は海洋で採食する鳥や、集団繁殖する鳥、森林性の鳥など多様な生態の鳥がいます。鳥を含む動物の骨は、考古学において土器や石器といった人工物とは異なった視点から人々の生活を復元できる貴重な情報源です。

縄文人に利用された鳥

縄文文化の遺跡からは様々な鳥の骨がみつかります。その主な生息域は海洋域(アホウドリ科、ミズナギドリ科、ウミツバメ科、ウミスズメ科、カモ科の一部)、沿岸域や汽水域(アビ科、ウ科、カイツブリ科、

カモメ科、カモ科の一部)、淡水域や湿地(カモ科の一部、クイナ科、サギ科、コウノトリ科、トキ科、ツル科)、草原や森林(キジ科、タカ科、ハヤブサ科、ハト科、カラス科、キツツキ科、フクロウ科)と多様です。縄文人は様々な環境下で鳥を獲得していたことが明らかです。一方で、縄文人に利用された鳥類は遺跡によって大きく異なることが知られています。特定の鳥を求めて広い範囲を探し回っていたのではなく、むしろ遺跡の周辺で獲得しやすい鳥を利用していたと考えるのが良さそうです。

日本列島の縄文文化の遺跡からもっとも普遍的、かつ多数みつかるのはカモ科の鳥の骨です。現在日本列島で見られるカモ科には、オオハクチョウやコハクチョウ、ヒシクイ、マガン、マガモ、オナガガモ、キンクロハジロ、コガモなど50種以上が含まれます。前述のように、鳥類には季節によって生息地を変える「渡り」をする種があります。ある地域に着目してそこで越冬する種は「冬鳥」、夏期に飛来する種は「夏鳥」、渡りの途中で通過する種は「旅鳥」、一年を通してその地域に留まる種は「留鳥」と呼ばれます。カモ科の鳥のうち、オオハクチョウとコハクチョウを含むハクチョウの仲間(ハクチョウ属)とヒシクイやマガンを含むガンの仲間(ガン族)、それにオナガガモやキンクロハジロなどカモの仲間(カモ亜科)の多くは、北海道を秋と春に旅鳥として通過し、東北地方以南で冬鳥として越冬します。そのため、これらの鳥を縄文人が獲得できた季節は北海道では春もしくは秋、東北地方以南では冬と推定できます。

東北地方以南の縄文文化の遺跡では、キジ科の鳥の骨も頻繁にみつかります。日本列島に生息するキジ科の鳥にはキジやヤマドリ、ライチョウ、エゾライチョウ、ウズラなどが含まれます。このうち東北以南の遺跡で頻繁にみつかるのはキジやヤマドリと考えられる大きさの骨です。両種は大規模な季節移動をしない留鳥です。そのため一年中利用された可能性があります。草原や林縁などに生息する比較的大型の鳥であるキジ

やヤマドリは、縄文人にとって格好の獲物であったと考えられます。北海道の縄文人がキジ科の鳥をあまり利用していないのは、両種が北海道に分布しないためということが言えそうです。

これまでのところ、ニワトリの骨は縄文文化の遺跡からみつかりません。私たち現代日本人にとって「鳥肉」と言えばニワトリの肉ですが、縄文人はその味を知らなかったと考えられます。ニワトリは弥生文化の一要素として日本列島にもたらされたと考えられています。その最古の例は、現在のところ約2300年前。当時のニワトリはオスに偏っており、日本列島のほとんどの地域では継代飼育はできていなかったと考えられています。ガチョウやアヒルといったカモ科の家禽^{かきん}も飼育されていた形跡は発見されておらず、縄文人は家禽を飼育してはいなかったようです。

エゾライチョウやウズラといったキジ科の鳥は北海道にも生息していますが、これらの鳥の骨は北海道の縄文文化の遺跡からあまりみつかりません。一方、北海道の沿岸部の遺跡では、アホウドリ科やウミスズメ科、ウ科、カモメ科、アビ科など、主に海洋や海岸部に生息する海鳥の骨が多数みつかりました。また北海道を含む縄文文化の遺跡では、カラス科を除くスズメ目^{もく}の鳥の骨はほとんどみつかりません。いくつかの遺跡では土を水で洗いながら篩^{ふるい}にかけてすべての骨を回収していますが、そのような遺跡でも多量のスズメ目の鳥の骨がみつかることは極めて稀^{まれ}です。ほとんどの縄文人にとって、スズメ目の小鳥は主たる獲物とはみなされていなかったと考えるのが良さそうです。

縄文人の鳥の利用法

鳥の利用法としてもっとも最初に思い浮かぶのは「食べる」ということでしょう。キジ科やカモ科、アホウドリ科やウ科などの鳥の骨が縄文文化の遺跡から主にみつかることから、縄文人は比較的体重が重く肉量の多い鳥を中心に獲得していたと言えそうです。縄

文人が鳥の肉を食べていたことの間接的な証拠として、いわゆる「胸肉」の下に位置する鳥口骨^{うこうこつ}や胸骨、あるいは「もも肉」の下に位置する大腿骨^{かんどこつ}や寛骨などについて石器による傷痕が挙げられます。胸肉やもも肉は厚いため、肉を取り外さなければその下に位置する骨に傷がつくようには思えません。一方で、縄文文化の遺跡からみつかった鳥の骨に解体のための傷跡がみつかることは稀で、あまり研究の蓄積もありません。しかし、肉を取り外すための解体では、熟練者であれば骨に傷跡をほとんど残さなかったことも想定されます。そして何より、狩猟で新鮮な鳥を獲得しておきながら食べなかった理由を考えるほうが難しそうです。鳥の肉は頻繁に食べられていたと考えて間違いないでしょう。先ほど紹介したように、北海道の沿岸部の遺跡では、アホウドリ科やウミスズメ科、ウ科などの海鳥の骨が多数みつっています。北海道の縄文人にとって「鳥肉」は陸上ではなく海で獲得する資源だったと考えられます。これらの魚食性の鳥は、なんとも言えない生臭い臭いがします。私の感覚では、あまり食欲がそそられるものとは思えないのですが…。

縄文人の鳥の利用法としてもっとも明白なのは、その骨を道具(骨器)の素材として用いていたことです。縄文文化の遺跡からは、鳥の骨を加工した様々な骨器がみつっています。狩猟に用いたと考えられる刺突具^{しとつ}や、ヘラ、針とその入れ物である針入れ、さらに装飾品である管状垂飾や垂飾状骨製品などです。このうち、刺突具と針、そして管状垂飾はほぼ日本列島全域で確認されています。これらの骨器は主にアホウドリ科やウ科、カモ科、タカ科などの中型から大型の鳥の上腕骨や尺骨^{とうこつ}、橈骨など上肢の骨を素材としています。また垂飾状骨製品にはくちばしにあたる歯骨や大腿骨^{あしゆび}、趾の先にあたる末節骨など様々な骨が用いられています。一方で、縄文文化の遺跡からみつかった鳥の骨のうち、骨器を作成する際に切断された跡と思われる加工痕をもつものはそれほど多くはありません。そのため、縄文人は鳥類を骨器の素材としての需要のみ

から獲得してはいなかったと考えられます。

そして、鳥だけから得られる有用な資源として羽毛や羽根があります。現代でもダウンジャケットや羽根布団に利用されますね。また、矢の飛行方向を保つためにつけられる矢羽にも利用されています。しかし、縄文文化の遺跡から羽毛や羽根、あるいはそれを用いた道具が出土したことはないものと思われます。これは、羽毛や羽根などの有機物は腐りやすく、土中に長期間保存されにくいためと考えられます。鳥の羽根を矢羽や装飾物として利用する例や、鳥の羽衣を利用した衣服も北方の諸民族で知られています。例えば、千島アイヌはウミガラスまたはツノメドリから衣服(鳥皮衣)を作っていました。1着の鳥皮衣に、何と50羽もの鳥が利用されたと言われています。また、アリューシャン列島の先住民であるアリュートのパーカー(フードの付いた外套^{がいとう})でも、55羽のエトピリカもしくは25羽のウミウが一着あたり利用されたそうです。縄文人も鳥の羽毛や羽根、羽衣を利用した可能性は高いと考えられます。

鳥と礼文島の縄文人

大学や大学院の学生だった約25～30年前、私は北海道の遺跡の発掘調査に毎年のように参加していました。その中でも、大量の鳥骨が出土し、私自身が分析した礼文島の浜中2遺跡と船泊遺跡^{ふなどまり}はとくに印象に残っています。2つの遺跡は稚内の西にある花の浮島、礼文島にあります。ともに島の北部・船泊湾に面した砂丘上にあり、距離にして約2kmしか離れていません。しかし、2つの遺跡に約3500年前(縄文後期)の縄文人が残した鳥の骨には非常に大きな違いがありました。

浜中2遺跡の縄文後期の層からはたくさんの屋外炉がみつかり、縄文人に初夏のキャンプサイトとして利用されたと考えられています。炉の周辺からは大量の石器の薄片や土器、トドやニホンアシカなどの海獣類の骨、そして大量の鳥骨がみつかりました。調査の結果、鳥骨の約45%がカモメ科、約39%がウミス

ズメ科の鳥の骨であることが分かりました。非常に面白いことに、大量にみつかったカモメ科の鳥の骨の約97%が若い鳥のものでした。成鳥の骨は表面がツルツルしていてなめらかです。一方、若い鳥の骨は表面がボソボソしています。ちょうどフライドチキンを食べ出てくるあの骨たち。あのような感じの骨が若い鳥のものなのです。カモメ科の幼鳥や若鳥の標本との比較から、生後10日前後あるいはそれよりさらに若い鳥など、まだ繁殖地で過ごしていたはずの幼鳥の骨が高頻度で含まれることが分かりました。浜中2遺跡を利用した「浜中縄文人」はカモメ科の繁殖地でかなりたくさんヒナを獲得していたと考えられました。ウミネコなどのカモメ科の鳥は初夏に集団で繁殖します。まだ飛べないカモメ科のヒナたち。その繁殖地での狩猟はかなり簡単なものであったと考えられます。

浜中2遺跡のカモメ科の鳥の骨ではもう1つ面白い発見がありました。それは幼鳥や若鳥の様々な部位の骨（脛足根骨や尺骨、橈骨）を用いた管状垂飾と、その製作過程で捨てられたと考えられる加工の痕跡のある骨が大量にみつかったことでした。発掘調査時には認識されていなかったこれらの発見によって、浜中縄文人はカモメ科のヒナを骨器の素材としても活用していたことが分かったわけです。このほか、新鮮なヒナの肉や孵化前の卵は食料となったでしょうし、またそのダウンも利用されていたかもしれません。成鳥の骨はカモメ科の骨の約3%に過ぎなかったことから、浜中縄文人は繁殖地にいたはずの飛んで逃げるために捕まえにくい成鳥には目もくれず、ヒナ（や卵）に狙いを定めて捕獲・採集していたと考えられます。

カモメ科のほか、ウミスズメ科の鳥も初夏に集団で繁殖します。そのヒナの狩猟も、繁殖期に特定の場所に行きさえすればかなり容易だったはずですが、浜中2遺跡ではウミスズメ科の若い個体の骨は認められませんでした。ウミスズメ科の鳥の繁殖地は浜中2遺跡の周辺になかった可能性が高いと考えられます。浜中2遺跡のように遺跡から幼鳥の骨が大量にみつか

るのは極めて稀です。この背景には、幼鳥や若鳥の骨は脆く速やかに分解されてしまうため、遺跡に残りにくいということがあるのかもしれませんが。アホウドリ科やミズナギドリ科、ウ科、サギ科なども集団で繁殖する鳥です。浜中縄文人のような集団繁殖地でのヒナの狩猟やその骨を利用した骨器の製作は縄文文化で広くおこなわれていた可能性があります。

続いて参加させていただいた船泊遺跡の発掘調査では、浜中2遺跡とはまったく異なる鳥類利用のパターンをみることができました。屋外炉のほかに住居址や墓、作業場のみつかった船泊遺跡でも、トドやニホンアシカなどの海獣類の骨とともに鳥類の骨が多数みつかりました。しかし、船泊遺跡の鳥の骨は約83%がアホウドリ科の鳥のもので占められていました。カモメ科やウミスズメ科の鳥の骨もみつきはしたものの、ごくわずかでした。浜中2遺跡ではアホウドリ科の鳥の骨は約0.1%に過ぎなかったので、利用された鳥類が大きく異なっていたことは明らかです。アホウドリ科の鳥の繁殖地は遺跡周辺にはなかったと推定されるため、船泊遺跡を利用した「船泊縄文人」は洋上での狩猟でアホウドリ科の鳥を獲得していたと考えられます。船泊遺跡のほうが浜中2遺跡よりも少し新しい時代のものであることは分かっていますが、この鳥類利用の差がなぜ生じたのかはよく分かっていません。

実は、船泊縄文人も浜中縄文人も、礼文島にいたのは春から夏のみで、定住はしていなかったと考えられています。そして土器の文様などから、船泊縄文人も浜中縄文人も道南の渡島半島周辺に本拠地をもつ人々であったと推定されています。両遺跡を利用した縄文人は春から夏に海鳥を含む「海の幸」を求めて礼文島に船で移住し、秋になると南下して本拠地で過ごすという生活を繰り返していたようです。

ちょうど渡り鳥のような暮らしをしていた礼文島の縄文人。カモメ科の繁殖地での狩猟やアホウドリ科の洋上での狩猟は彼らの生業カレンダーに組み込まれたものだったことでしょう。